

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニコス・カザンザキス 『グレコへの報告』 (二) : 父、母、息子
Author(s)	藤下, 幸子
Citation	プロピレア , 28 : 71 - 50
Issue Date	2022-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053439
Right	Copyright (c) 2022 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ニコス・カザンザキス

『グレコへの報告』(二)

父、母、息子

藤下 幸子 訳

現代ギリシア語教室エリニカ

父

私の父は、話をすることはめつたになく、笑ったり口論したりすることもなかった。ただ時折、歯ざしりをしたり、拳を握り締めたりすることがあり、そのような折に、たまたま殻付きのアーモンドの実を持っていたりすると、指でひねってそれを粉々にしてしまつたものだっ

た。ある時、父はアガスーがキリスト教徒に鞍をつけ、ロバのように荷物を背負わせようとしているのを見て、あまりにも強く怒りにかられ、そのトルコ人に襲い掛かり罵声を浴びせてやろうとしたが、唇がよじれて人間の言葉を発することが出来ず、馬のように嘶き始めた。私はその場に、父の前に居たが、未だ子供だったので、父を見ていて恐怖に捉われた。

ある昼時、食事をしに家に戻る途中に通りがかった路地で、父は私たちの金切り声や戸が閉まる音を聞いた。酔っぱらつたトルコ男がヤタガン剣を引き抜いてキリスト教徒たちを追い廻していた。その男は父を見るや否や襲い掛かって来た。猛暑でもあり、仕事の疲れもあつたので父は喧嘩をする気にはならなかつた。一瞬、その路地から身を引き返して立ち去ろうという思いが脳裏をかすめた。誰にも見られていなかったのだから。だが、それを恥じた。身に纏つていた前掛けを解き、握り拳に巻きつけ、トルコ男が父の頭上にヤタガン剣を振りかざした時、その男の土手っ腹に拳骨を一発喰らわせ、地面に叩きのめした。身を屈め、男の手からヤタガン剣をもぎ取り、家へと向かった。父は汗びつしよりとなつていたので、母は着替えのワイシャツを持ってきた。私は三歳

ぐらいいだつたらう、ソファに座つて父を見ていた。父の上半身は毛むくじやらで湯気が立つていた。父は着替えをしてすつきりすると、ヤタガン剣をソファの上、私の傍に投げ捨てて、妻の方を向いて言った。

「お前の息子が大きくなつて学校へ行くようになったら、鉛筆を削るように、これを与えなさい」と。

優しい言葉をかけてもらった記憶は一切ない。たつた一度を除いては。蜂起の時代^二、私たちはナクス島に住んでいて、私はカトリック系の学校^三に通い、カトリック教の司祭に学んでいた。私たちは試験を受けて、私は多くの賞を受賞し、金文字装丁の大きな本を貰った。一人でそれらを持ち上げられなかつたので、父が半分持つてくれ、一緒に家に戻つた。帰り路で父は全く口を開かなかつた。息子が自分を辱めなかつたという喜びを隠そうと努めていた。ただ、家に入った時、私を見ずに、ある種の優しさを滲ませて言った。

「お前はクレタを辱めなかつた」と。

だが直ぐに、感動を露わにしてみました自分自身に腹を立てた。そして一晩中私を見るのを避け、しかめ面をしたままだつた。

父は、重苦しい陰のある、自己抑制の効かない人で

あつた。たまたま親戚や隣人たちの訪問客があり、べちやくちやと甲高い声でお喋りを始め、笑つていた時に、突然戸が開き、父が入つて来たりすると、お喋りや笑い声は途切れ、ある重苦しい影が家を圧迫した。父はもごもごと挨拶をし、中庭に面した窓際にあるソファの隅の、お定まりの場所に座り、目を伏せてタバコ入れを開け、黙つてタバコを巻いた。客たちは空咳をし、不安そうに父を盗み見し、しばらくして、さりげなく立ち上がり、爪先立つて帰つて行ったものだった。

父は司祭たちを憎んでいた。道で司祭に出くわすと、悪い遭遇を被り除けるように十字を切つた。司祭が怯えながら「おはようございます、ミハリス隊長^四」と挨拶すると、父は、「くたばりやがれ！」と答えたものだった。司祭たちに会わないように、決して礼拝には行かなかつた。ただ、毎週日曜日、礼拝が終わり皆が帰つてしまつた後、教会に入り、奇跡を起^コす聖ミナス^四のアイコン^五の前に蠟燭を一本灯した。キリストや聖母マリアより聖ミナスに深く帰依していた。というのは聖ミナスがメガロ・カストロ^六の隊長だつたから。

父の心は持ち上げられないほど重かつた。何故？ 年老いてはいたが仕事は上手くいっていったし、妻にも子供

たちにも不満はなかった。人々も父を敬っていた。最下層階級の何人かは、父が通ると敬意を払って席から立ち上がって手のひらを胸に当て、《ミハリス隊長》と声を上げた。復活祭の時も、キリストの復活の後に、府主教は他の名士たちと共に父を屋敷に招き、赤い卵と共にコーヒーや復活祭のクルーリ^レで父をもてなした。更に、十一月十一日の聖ミナス祭の日も、祈念行列が父の家の前を通る時、行列は立ち止まって祈りを捧げた。

しかし父の心は晴れなかった。《ミハリス隊長、どうしてあなたの唇に笑みが浮かぶことが決してないのでですか？》とメッサラ出身のエリアス隊長は思い切って尋ねた。父は《エリアス隊長、どうしてカラスは黒いのですか？》と答え、くわえていたタバコの吸殻を吐き捨てた。またある日、父が聖ミナス教会の堂守に、こう言っているのを聞いたことがある。《私の父を見るべきだ。私ではなく、私の父を。彼はドラゴンそのもので、彼の前では私なんか一体何なんだ？ 吹けば飛ばような者だ》。祖父はかなり老いていて、目が不自由だったが、一八七八年の蜂起^ハの時には武器をまだ携帯し、闘おうと山に向かった。しかし、トルコ人たちは彼を包囲し、投げ縄で彼を捉えてサバシア^ナ修道院^ハの外で虐殺した。ある

日、至聖所の小窓のところで祖父の頭蓋骨を見た。祖父の頭蓋骨は至聖所で司祭たちによって護られ、浄められたカンディ^ラの油を塗られて光沢を放っていたが、剣の傷跡が深く刻まれていた。

「僕のじいちゃんはどうな人だったの？」と母に尋ねた。

「あなたの父さんに似てたけど、もっと色黒だった」

「どんな仕事をしたの？」

「戦争をしていたわ」

「戦争がない時は？」

「長いキセルでタバコを吸って山を見ていたわ」

私は幼くて敬虔だったので、更に尋ねた。

「教会には行っていた？」

「いいえ。でも月始めの日には司祭さんを家に招いて、クレタが再び武装蜂起するように祈ってもらっていたわ。あなたのお爺さんは勿論隠居していて、仕事はしていません。また武器を腰に巻き付けていた時『お父様、死ぬのは怖くないですか？』と一度尋ねたことがあったけど、答えてくれなかったし、私の方を見ようとしたわ」

私は成人した時、《女の人たちを愛していた？》と母に更に尋ねたかったが、恥ずかしく思ったので、そのこ

とは決して知り得なかった。だが、女の人たちを愛していたのは確かだった。というのは、祖父が殺された後、彼の衣装箱が開けられた時、黒や茶色のお下げ髪が一杯詰った枕が見つかったから。

母

母は心の清らかな人だった。心が折れることなく、ライオンの息遣いを、どうやって五十年間も側に感じていることに耐えられたのだろうか。大地の忍耐力や持久力や優しさを持っていた。母方の先祖は皆、農民であった。大地に身を屈め、大地にへばりつき、足も手も骨の髄も土だらけだった。大地を愛し、全ての希望を大地に託していた。祖父も曾祖父も大地と一つになっていた。日照りの時には大地と共に自分たちも喉を渴かせ、秋の初めての雨がどっと降った時には、骨がきしみ、葦のように膨らんだ。大地の腹を耕し、鋤の刃で深く線を刻む時、妻と寝た初夜のことを胸や腰に蘇えらせていた。

年に二度、復活祭とクリスマスの日、祖父は孫たちや娘に会いに遠くの村を出立し、メガロ・カストロにやってくるものだった。いつも、媚の野獣が家にいないとよく分かっている時を見計らって訪れ、戸を叩いた。

達者な老人で、白髪はぼさぼさで、青い目に笑みを浮かべ、節くれだつた重い大きな手をしていた。手を伸ばして私を撫でてくれると、私の皮膚は擦りむけた。一張羅の濃い藍色のズボン、黒いブーツ、青い水玉模様の白い頭スカーフを身に着けていた。レモンの葉に包んだいつも同じ手土産を持って来た、窯で焼いた子豚を。笑いながらその包みを開くと、家中にいい香りが広がった。その時以来、祖父と焼いた子豚とレモンの葉がとても強く繋がりが合い、一つになっていたので、焼いた豚肉の匂いを嗅いだり、レモンの果樹園に入った時は、焼いた子豚を手を持って笑っている不死の祖父が、いつも私の脳裏に浮かび上がってくるようになった。私はそれを嬉しく思っている。というのも世界中で、もう誰も祖父のことを覚えていないが、私が生きている限り祖父も私の内で生きていて、私たちは一緒に死ぬのだから。この祖父は、亡くなった私の近しい先祖たちが死なないように、私が死にたいと願わぬようにさせてくれた最初の者となった。その時以来、私の愛する多くの亡くなった者たちは、土の中ではなく、私の記憶の中に下りたのである。私が生きている限り彼らも生きているだろうということを、私は既に知っている。

祖父を思い出すと、彼が死に打克つことが出来ると感じて、私は安堵する。ランブの明かりのように、こんなにも穏やかで無垢な輝きを自分の顔の周り一面に輝かせている人に出会ったことがない。祖父が初めて家に入つて来るのを見た時、私は叫び声を上げた。だぶだぶのズボンを履き、赤い腰帯をして、お月さんのような真ん丸い顔で笑っていたので、私には無垢なネロパプリス⁺か大地の精霊のように思われた。今、それが庭から出てきて、濡れた草のように匂っている。

祖父は懐から革製のタバコ袋を取り出し、タバコを巻き、点火器とホクチャケ⁺を取り、タバコに火をつけて吸っていた。自分の娘や孫たちや家の中を幸せそうに眺めながら。時々口を開き、子を産んだ雌馬のこと、雨や雹のこと、うさが増えすぎて菜園を荒らしていることなどを話した。私は、祖父の膝に抱き上げられ、腕を彼の首に回して話を聞いていた。すると、見知らぬ世界、畑や雨やうさが私の心に広がり、私もうさぎになって、こっそりと祖父の中庭に出て彼のキャベツを食べていた。

母は誰彼となく村人たちについて、どうしているか、未だ存命かなどと祖父に尋ねていた。祖父は、ある時は、

あの人はとても元気にやっている、子をもうけたよ、とか、またある時は、彼は亡くなった、もう居ない、気落ちしないように、とか答えていた。死についても、出産についてと同じように、穏やかに、キャベツやうさぎについてと同じ口調で話していた。≪ねえ、お前、あの人は亡くなった。埋葬してやったよ。カロンのために持っておくように、手のひらにオレンジを置いてやった。俺たちの家族についてのハデスへの言伝も渡した。万事、しきたり通りに事がはこんだよ。お蔭さんで≫と言った。そしてタバコを吸い、鼻孔から煙を出して微笑んだ。

彼の妻もまた、かなり前に亡くなっていて、祖父は家に来るたびに彼女の思い出話をして涙ぐんでいた。自分の畑よりも、自分の雌馬よりも彼女を愛し、尊敬していた。結婚した時は貧しかった。だが、辛抱した。≪貧乏や無一物は、大した問題じゃない。良い奥さんが居るだけで十分だよ≫と言っていた。クレタの村の当時の習慣によると、夫が夕方畑から戻ると、妻は生ぬるいお湯を用意し、腰をかがめて夫の足を洗うということだった。ある夕方、祖父がすっかり疲れて仕事から戻って、中庭に腰をかけると、妻は洗面器に生ぬるい湯を持って来て、彼の前に跪き、土埃にまみれた彼の足を洗おうと手を伸

ばした。祖父は愛おし気に見、手が日々の家事によつて荒れ、髪が白くなり始めているのに気づいた。《可哀想に、年を取ったものだ、私の手で髪が白くなった》と考え、彼女が憐れになった。足を上げ、湯の入った洗面器を蹴ってひっくり返した。《ねえ、お前、今日からは俺の足を洗わなくていいよ。勿論お前は俺の奴隷じゃない、奥さんであり、ご主人様だ》と言った。

「神よ、彼女の魂を許し給え！ 彼女は決して私をがっかりさせはしなかった。たった一度だけは……」と、ある日祖父が言うのを私は聞いた。

彼は口をつぐみ、ため息をつき、しばらくして言った。「勿論、毎日々暮れには玄關口に出て来て俺が畑から戻るのを待っていた。走ってきて俺の肩から仕事の道具を下ろし身軽にしてくれ、一緒に家に入ったものだった……。なのに、ある黄昏時、そのことを忘れて、走っては来なかった。俺は悲しみに胸が張り裂けてしまった……」

祖父は十字を切つて、呟いた。「神は偉大だ。俺は神を信じている。彼女を赦し給うだろう」

再び目が輝き、母を見て微笑んだ。また、ある別の日に私は訊ねた。

「でも、可哀想じゃないの？ おじいちゃん。子豚を殺して食べるのを可哀想に思わないの？」

「可哀想だよ、おまえ。可哀想に思っているよ。神はそのことをご存じだ。けどな、旨いんだよ、奴らは……」急に笑い出しながら、私に答えた。

このバラ色の頬をした老人を思い出すたびに、私は大地や、大地の上の人間の骨折りに、増々信頼を置くようになっていく。彼は肩の上に地球を担いでいる柱の一本であり、倒れることはない。

ただ一人、私の父だけは祖父が気に食わなかった。彼が自分の家に入って来て自分の息子と話をするのが気に障った。祖父が私の血を汚すのではないかと恐れているかのように。クリスマスや復活祭の時、ご馳走がテーブルに並べられても、子豚の丸焼きに手を伸ばそうとはしなかった。父は子豚の臭いに吐き気を催し、テーブルから急いで立ち上がり、悪臭を追い払おうとタバコを吸っていた。一言も口を利かずに。ただある時、祖父が帰つた後で、見下すように眉根を寄せて呟いた。

「ベツ！ 青い目の奴め！」

後になって知った、世界中で青い目ほど、父が嫌悪しているものは無いということを。《悪魔は青い目で赤い

髪をしている」と父は言ったものだ。

父が家に居ない時は、何と穏やかだったことか！ 中庭の閉じられた菜園での時間は、何と速く幸せに過ぎて行ったことか！ 井戸の上のぶどう棚や、中庭の隅の大きなアカシアの木、周りのバジルの鉢、キンセンカやアラビア・ジャスミンが良い香りを漂わせ、母は窓の前に座って靴下を編んだり、葉野菜の掃除をしたり、幼い妹の髪を梳いたり、よちよち歩きの練習をさせたりしていた。そして、私は背もたれのない腰掛にちよこんと座り、母を見つめ、閉じられた門の外を通る通行人たちの足音を聞いていた。ジャスミンや湿った土の匂いを吸い込むと、世界が私の体に入って来て、その世界を包み込むように、私の頭の骨がきしみ、開いた。

母と共に過ごした時間は不思議なことで一杯だった。

母は窓の傍の椅子に、私は自分の背もたれのない椅子に、互いに向かい合って座った。私たちの間の空気が乳に満ち、その乳を吸っているかのようで、沈黙のうちに、胸が一杯になり、満ち足りるのを感じた。

私たちの上にはアカシアの木があり、花が咲いている時には中庭にいい香りが漂っていた。私はこの芳香を放つ黄色い花がとても好きだった。母はそれを衣装箱に入

れたので、私たちの下着やシーツ、そして私の子供時代は全てアカシアの香りに満ちていた。

穏やかに沢山のおしゃべりをした。時には母が彼女の父や生まれた村について話し、時には私が読んだ聖人の伝記について話をした。聖人たちの生涯に私の想像の尾ひれを付けて。彼らの殉教の話は私には物足りなく、母が泣き始めるまで自分の創作も付け加えた。そんな時、気の毒になつて母の膝に座り、髪の毛を撫でて慰めたものだった。

「お母さん、聖人たちは天国に入ったんだよ。心配しないで。花咲く木々の下を散歩して、天使たちとおしゃべりをして、苦しかったことは忘れてるよ。日曜日ごとに金色の服を着て、房の付いた赤い帽子をかぶり、神様を訪問するんだよ」

すると母は涙を拭い、《それって本当のことなの？》と言いたげに私を見つめ、微笑んでいた。

そして籠の中のカナリアは、私たちの話を聞いて首を伸ばし、うっとりとして幸せそうに囁いていた。天国から下りてきたように、人々を慰めるために、ひと時、聖人たちを後に残して地上に下りて来たかのように。

母とアカシアの木とカナリアは、私の心の中で分かち

難く繋がり、死ぬことはなかった。アカシアの香りを嗅いだり、カナリアの囀る声を聞くと、必ず母が墓から——私の臓腑から——立ちあがり、このアカシアの香りとかナリアの囀りに結びついた。

母が笑っているのを見たことがなかった。ただ微笑むだけで、くぼんだ黒い眼は忍耐と好意に満ちた眼差しで人々を見つめていた。無垢な精霊のように家の中を行ったり来たりし、全てのことを難なく物音も立てずに余裕を持ってこなしていた。手が善意の魔法の力を持ち、日々の必要なことを快く取り仕切っているかのようだった。母は妖精かもしれない、黙って母を見ながら、おとぎ話が語っている妖精かもしれないと考えた。すると、空想が子供の心の中でこのように働き始めた……。ある夜、父が川を渡っていた時に、月明かりの下で彼女が踊っているのを見、襲い掛かって頭のスカーフを奪い取った。彼女を家に連れ帰りその時から妻とした。今や一日中、母は家の中を行ったり来たりして、頭スカーフを探し出して髪に被り、また妖精に戻って立ち去ろうとしているのだ。母が行ったり来たりして、食器棚や衣装箱を開け、瓶の蓋を開け、ベッドの下に身を屈めたりしているのを見て、私は母が魔法の頭スカーフを見つけ出

し、消え去ってしまったのかと怯えていた。この恐怖は長年続き、幼い私の心を深く傷つけた。そして未だに私の心の内に、より筆舌に尽し難く残っている。私は大きな不安を感じながら、愛する母の表情や素振りの一つ一つを見守っていた。というのは母が去って行こうと頭スカーフを求めているのを知っていたから。

たった一度だけ、母の目が不思議な輝きを放ち、笑い、喜んでいたのを覚えている、母が未婚か婚約中の時そうだったであろうように。五月一日の五月祭の日に、父が洗礼を執り行うために、私たちはフオデレ¹²という村に行つた。そこには豊かな水やオレンジの果樹園がたくさん有った。突然、激しい豪雨になり、空が水になり、大地に水をぶちまけた。大地はキャツキヤと騒いで胸を開き、男性的な水を懐深くに受け入れた。村の名士たちが妻や娘たちを伴って、名付け親の大きな部屋に集まっていた。雨や稲妻が戸口や窓の隙間から入ってきて、空気はオレンジと土の匂いがした。ご馳走やブドウ酒やラキや前菜が出たり入ったりしていた。夜になってランプが灯ると男たちは上機嫌になり、伏し目がちの女たちも視線を上げ、ヤマウズラのようにキャツキヤと喋り始めた。外では雷神がまだ唸っていて、雷鳴が一層激しくな

り、村の狭い小道は川になり、石は転げ落ちて、ハッハと笑っていた。神は土砂降りとなって大地を抱きしめ、水を与え、実を実らせていた。

父は母の方を向いた。父が優しく母を見るのを初めて見た。父の声も初めて優しくなっていた。

「マルギ、歌いなさい」と母に言った。

こんなにも多くの男たちの前で、母に歌うように許可を与えた。私はうろたえて立ち上がった。何故だか分からないが、腹を立てていた。母を守りたいと望むかのように、母の処に走って行こうとした。だが、父は私の肩に指を触れ、私を座らせた。母が見知らぬ人のように思われた。全ての雨と稲妻に抱きしめられたかのように顔が輝き、母は背筋を伸ばした。カラスの濡れ羽色の長い髪が突然解かれ、背中を覆い、尻にまで懸ってきたのを覚えていた。そして歌い始めた……。何という声だったか！深く、優しく、少しかすれ、情熱に満ちていた。父の方に顔を向け、目を半ば閉じてマンディナダ^{十三}を歌った。このマンディナダを私は決して忘れないだろう。何故それを歌ったのか、誰の為にそれを歌ったのか、その時は分からなかった。が、その後大きくなってから理解した。母は、甘く抑えた情熱に満ちた声で歌い、父を

見つめていた。

あなたが歩くとき、私はうっとりする

どうして道の辺に 花が咲かないの

どうしてあなたは 金の翼にならないの！

父を見ないように、母を見ないように、私は遠くに視線を背けた。窓の処に行つて額を窓ガラスに付けて、降りしきる雨が土を侵食していくのを見ていた。

洪水のような状況は一日中続いた。夜の帳が下り、外の世界は暗くなっていた。空と大地が交わり、双方とも泥になった。さらに多くのランプが灯り、みんな壁の方に引き下がった。場所を作るために腰掛やテーブルを脇に寄せた。若い男たち、若い女たち、年寄りたちも踊るのだ。リラの奏者が、部屋の真ん中の背もたれのない高い椅子にどっしりと座り、弓を剣のように手に持った。そして、マンディナダを口髭の中でぼそぼそ吹き、演奏し始めた。男たちも女たちも足がムズムズし、体に翼が生え、互いに見つめ合つてサツと立ち上がった。その時、青白くて痩せた四十歳くらいの女が前に進み出た。クルミの葉で磨いたので唇はオレンジ色をし、月桂樹の油が

塗られたカラスの濡れ羽色の髪はピカピカ輝いていた。私は彼女の方を見、そして怖くなった。何故なら、彼女の目の周りには青黒い輪が出来ていて、その真ん中深く、漆黒の目が輝いていた。いや、輝いていたのではなく、めらめらと燃え上がっていた。一瞬、見つめられたような気がして母の前掛けに掴まった。この女が私を捕まえて連れ去ろうとしているように思われた……。

「いいで〜！ スルメリナ！」山羊髭の逞しい老人の声がして、彼女の前に躍り出た。黒い頭スカーフを解き、片方の端をその女に渡し、もう一方は自分が持ち、二人とも我を忘れて、背筋を伸ばし、体を蠟燭のようにまっすぐにして踊りに身を投じた。

女は木靴を履き、木靴を木の床に打ち付けて床を強く反響させ、家中が揺れていた。彼女の白いスカーフが解け、首を飾っていたフロリン金貨が見えた。彼女の鼻孔はびくびく動き、空気の臭いを嗅いでいた。周りの男たちの情欲的な息遣いが溢れていた。彼女は身を屈め、ぐるりと回り、前に居る男に倒れ込まんばかりだった。しかし、腰を捻り、一瞬に男の前から姿を消した。すると老いた踊り手は馬のように嘶き、女を空中で掴み、しっかりと捕まえていた、が、女は再び男からするりと逃れ

た。彼らは戯れ、追いかかけ合い、雷と雨は消え失せ、辺りは沈み込み、混沌の上にこの女だけが残った。リラ奏者はもう腰掛に座っていられず、すつくと立ち上がった。弓は怒り狂い、もはや指揮を執るのを止め、スルメリナのステップを辿り、これもまた、人間のように、ため息をついて唸った。

老人の顔は怒り狂って紅潮し、女を見つめた。唇はわななき、今にも女に襲い掛かって八つ裂きにしようだった。リラ奏者はそれを察したのだろう、突然弓が止まった。踊りは中断し、二人の踊り手は足を中心に浮かしたまま取り残され、動かなくなつた。彼らの体に汗がどつと噴き出した。男たちは走り寄って老人を連れ去り、ラキで体をさすつた。女たちは、男たちに見られないように、スルメリナの周りを取り囲んだ。私もその中にもぐり込んだが、未だ男ではなかつたので、見逃してくれた。女たちは彼女の上着を開き、花の水を、首や、脇や、こめかみに振りかけた。彼女は目を閉じたまま微笑んでいた。その時以来、踊りとスルメリナと恐怖が繋がって一つになった。踊りと女と死が。四十年後、トビリシのホテル《オリエント》の高い屋上で、一人のインドの女性が踊ろうとして立ち上がった。彼女の頭上には星が瞬いて

いたが、屋上には明かりが無く、周りに十人ほどの男たちがいたが、彼らのタバコの小さな赤い火しか見えなかった。腕輪、耳飾り、寶石、そして足首には金の環をずつしりと付けて、女はゆつくりと、ある種の怖ろし気な神秘性を漂わせて踊っていた。崖つぶち、あるいは神の絶壁で、神と戯れ、近づき、遠ざかり、神を挑発しているかのように、そして落ちないかと、全身がぶるぶる震えていた。時にはじつとしたままで、腕だけが二匹の蛇のように、絡み合ったり離れたり、空中で妖しく交わっていた。小さな赤い火は消え、果てしのない夜闇の中に、踊っている女とその上の星だけが残った。星たちも女と共に踊っていた、動かずに。私たちは皆、固唾を呑んで見ていた。突然、私は恐怖に捉われた。これは崖つぶちで踊っている女ではなく、死に言い寄り、戯れている私たちの魂そのものであった。

息子

子供の頃の私は、脳に入ってきたものは何でも、その中に大そう深く刻み込み、また、それをとても食欲に受け入れたので、老いた今でも、飽きることなく心にそれを蘇らせ、それを再び生きている。海との、火との、女

との、世の中の匂いとの、全く初めての出会いを、誤謬のない正確さで思い出している。

私の人生に於ける最初の記憶は次のようなことである。這い這いしながら玄関まで行った。まだ真っ直ぐに立つことが出来なかった。憧れと恐れを抱きながら中庭の広々とした大気の中に柔らかな頭を突きだした。その時までは窓ガラスの内側から見つめていた。だが何も見えていなかった。その時は、単に見つめただけではなく、初めて世界を見たのだ。目を見張るような光景を！中庭の小さな菜園が、私には果てしないものに思われた。何千もの目に見えないミツバチのざわめき、うっとりさせるような匂い、暑い太陽は蜂蜜のようにねっとりとし、大気は剣で武装したようにピカピカ光り、剣の狭間では、色とりどりの動かない羽を持った昆虫が、天使のようにまっすぐに立ち、私に向かってやって来た。私は怯えて大声を上げた。目は涙に潤み、世界は消え失せた。

また或る日、棘のような顎鬚の男に抱かれ、港に連れて行かれたのを覚えている。港に近づくにつれて、脅すように、あるいは傷ついているかのように野獣が唸り、ため息をついているのが聞こえて来た。私は恐ろしくなり、その男の腕の中でもがき、帰りたくて鳥のような金

切り声を上げた。突然、イナゴマメやタールや腐ったシトロン^{十四}の刺激臭がした。それを受け入れようとして私の胸は開き、きしんだ。私を抱き上げていた毛深い腕の中で、私はどきどきしながら身悶えしていた。そして、ある道の曲がり角で、それは何という荒々しさ、何という爽やかさ、何と果てしない溜息だったか……。声と匂いに溢れ、小波の立つ濃い藍色の海全体が、泡立ちながら私の中に襲いかかって来た。私の柔らかなこめかみは崩れ落ち、私の頭は、笑いと塩気と恐怖で一杯になった。

それから、近所の女性、アニカのことを思い出される。結婚して間のない、ぼつちやりとした若い母親だった。長い金髪と大きな目をしていた。私は三歳くらいだったろう。その日の夕暮れ時、私は中庭で遊んでいた。菜園は夏の匂いがしていた。その女性は屈んで私を抱え、前掛けの上に乗せて抱き締めてくれた。私は目を閉じて彼女の開かれた胸元にもたれかかり、彼女の匂いを嗅いでいた。暖かくて濃い芳香、乳と汗が混ざりあった酸っぱい匂い、結婚して間もない体が湯気を立てていた。私は抱かれて、ぐੱつたりとなり喘いでいた。そして突然、意識が遠のき気を失った。近所の女性は吃驚して真っ赤に

なり、私をバジルの二つの鉢の間に下ろした。その時以来、もう私を前掛けの上に乗せてくれることはなかった。大きな目でとても優しく私を見つめ、微笑んでいた。

また、夏のある夜、私は中庭の傍にある、小さな私の腰掛にいつも通り座っていた。顔を上げて初めて星を見たのを覚えている。びっくり仰天して跳び上がり、恐ろしくて大声を上げた。《火花だ！ 火花だよ！》空が際限もなく燃えているように思われた。私の小さな体もカッカと燃えていた。

大地との、海との、女との、星空との初めての出会いは、こんな風だった。人生を最も深く生きている今この瞬間に於いても、赤ん坊だった時と同じ、そっくりそのままの憧れを抱いて、私はこれら四つの素晴らしい要素を生きている。私が赤ん坊だった時に私に与えられたのと同じ狼狽や恐怖や喜びを蘇らせることが出来る時、その時にのみ、これら四つの要素が深く——私の魂と体が可能な限り深く——生きているのを未だに感じる。私の魂を意図的に専有した最初の力がこれらのものだったのになつた。これら四つは私の内で、未解決のまま繋がりが、一つある。星空を見つめる時、ある時は花咲く菜園のよう、

ある時は暗くて危険な海、またある時は涙が溢れ黙っている顔のように私には思われる。

そして更に、私の個々の感動や考えは、それが非常に曖昧なものであっても、これら四つの最も基本的な構成要素から出来ている。最も形而上的な問題ですら、私の内で温かい物質的な形を取り、海や土や人の汗の臭いがある。理性は私に触れるためには、温かい肉体にならなければならぬ。匂いを嗅いだり、見たり、触ったり出来て、初めて私は理解出来るのだから。

これら四つの最初の触れ合いの他に、ある偶然の出来事が、私の魂に深い影響を与えた。《偶然の》とは？何かつまらないことを口走って威厳を損なわなにかと恐れる臆病な精神は、このような意気地のない分別臭い一般論によって解決出来ないことを《偶然》と称するのだ。私が四歳くらいの時だったろう、その年の初めに父は私に新年の贈り物、クレタで言うところの《良い手》として、くるくる回る地球儀とカナリアをくれた。私は自分の部屋の窓や戸を閉め、鳥籠の入り口を開け、カナリアを放してやった。カナリアは地球儀の天辺に止まって轉るようになった。何時間も何時間も……、私も息を凝らして聞き入っていた。

このとても単純な出来事は、全ての本よりも、後に知り合った全ての人たちよりも、私の人生により多くの影響を与えてくれたように思える。長年、貪欲に世界を巡り、あらゆるものを迎え入れ、そして別れを告げた時、私の頭が地球儀であり、私の頭の天辺でカナリアが轉っているかのように感じた。子供の頃の詳しい話をするのは、初期の記憶の魅力が大きかったからではなく、この年齢に於いては、夢に於いてと同様に、重要ではない表面的な出来事が、後の精神分析と同じほど、覆いを外して、化粧をしていない魂の真実の顔を見せるから。子供時代、あるいは夢に於いては、表現方法がとても単純であるから、最も複雑な内面の豊かさが、全ての余分なことから解放され、本質だけが残る。

子供の頭脳は柔らかで、肉体は繊細であり、太陽、月、雨、風、静寂、全てが子供の上に降りて来る。子供の頭脳はふわふわしたパン種であり、それら全てが子供の頭脳を捏ねる。子供は世界を貪欲に吸い込み、世界をはらわたに受け入れて消化吸収し、世界を子供に作り上げる。こんなことも思い出す。私は家の玄関に座っていることが多かった。太陽は輝き、熱風が吹き付けていた。近所の大きな家ではぶどうを踏み、辺り一带にムーストス

十五の匂いが漂っていた。私はうつとりとして目を閉じ、手のひらを差し伸べて待っていた。すると、神はやつて来た。私が子供であった時、神は決して私を騙したりはしなかった。神も私のような子供の姿でやつて来て、私の両手に彼のおもちやを置いてくれた——太陽、月、風を。《贈り物だよ、君に上げるよ、これらで遊ぶといいよ。僕は他のおもちやも持つてるから》と言った。目を開けると、神はもう姿を消していたが、私の両手には彼の玩具が残されていた。

私は神の全能を持つていたが、そのことを知らなかった。それを生きていたので、そのことを知らなかった。好きなように世界を創造していた。私は柔らかなパン種であり、世界も柔らかなパン種であった。幼かった頃、私は全ての果物の中で、サクランボが一番好きだったことを覚えていて。黒や赤の表皮の堅いサクランボをバケツの水の中に投げ込み、それらが水に浸かるや否や大きくなるのを、身を屈めてうつとりと眺めていた。けれども取り出すと、それらが小さくなっていくのを見て、とてもがっかりした。それで、それらが小さくなるのを見ないように目を閉じて、巨大に見えたままのサクランボを口にはおぼった。

この取るに足らないことは、老いた今に於いてさえ、現実に向き合う方法を明らかにしてくれる。現実をより輝かしく、より良く、私の目的により相応しく改良する。私の脳は叫び、説明し、証明し、異議を唱える。しかし私の内なる声が立ち上がり、《黙りなさい、脳よ、心の声を聞こうではないか》と脳に呼びかける。どの心？ 人生の本質、狂気である。すると心は囁り始める。

《現実を変えることは出来ない。だから現実を見る目を変えよう》と、私の敬愛するビザンツの神秘主義者は言う。子供だった頃、私もそうしていた。人生で最も創造的な瞬間である今もそうしている。

本当に、子供の目、耳、脳というものは、何と奇跡的なものであることか！ どんなにこの世界を食欲に取り込み、自分を満たして行くことか！ 世界は赤や緑や黄色の翼を持った一羽の鳥である。子供はそれを捕まえようと、どれほど懸命に追いかけることか！

実際、初めて世界を見、創造する子供の目ほど、神の目に似たものは他にない。始めのうち、世界は混沌としていて、森羅万象の全て、動物、木、人間、石は子供の目の前に入り乱れて流れていた。いや、子供の前ではなく子供の内に。形、色、声、匂い、稲妻、全てが流れて

いて、それらを安定させ、秩序を持たせることは出来なかつた。子供の世界はしっかりとした泥で作られているのではなく、雲で出来ていて、爽やかな風が子供のこめかみを吹き抜け、世界は凝縮したり、希薄になったりして消え失せる。同様に「天地創造」以前には、混沌は神の目の前をも通り過ぎて行つたのだろう。

子供の頃、私は見るもの、触れるものと一体になつていた。空や、昆虫や、海や、風と。その頃、風は胸を持ち、手を持っていて、私を愛撫してくれた。時には怒つて、私に反抗し、歩かせてくれないこともあつた。またある時は、私をなぎ倒したことも覚えている。ぶどう棚の葉を引きちぎり、母がとても奇麗に梳いてくれた私の髪を滅茶苦茶にしたこともあつた。近所のデIMITROSさんのスカーフを頭から奪い、彼の妻のピネロさんのワンピースの裾をめくり上げたりした。

私はまだ世界から切り離されてはいなかつた。だが次第に世界から分離していった。一方では世界の方から、他方では私の方から。そして取っ組み合いが始まつた。

ある日、その子供が玄関に座つて澱んで凝縮した世界の滝を受け入れていた時、突然理解する。五感がしつかりと定まり、それぞれが自分の道を刻み、世界の王国が

分割されたのを。そして先ず始めに嗅覚が私の内しつかりと定まつたのを覚えている。先ず嗅覚が混沌に秩序を与え始めた。

私が二、三歳だつた時、人はそれぞれその人特有の臭いを持っていて、顔を上げてその人を見る前に、その人が発散する臭いで誰だか分かつた。母は母特有の臭い、父はまた父独特の臭いを持っていた。叔父たちの間でも臭いは様々だつた。近所の女性たちの間でも、それぞれ異なつていた。そしていつも臭いによつて愛したり、つまはじきにしたりしていた。私を抱いてくれた男性は嫌だつた。時が経つにつれ、私のこの能力は薄れて行き、臭いは混じり合い、全ての人は同じ悪臭に沈んで行つた。汗とタバコとガソリンの臭いに。

私は、全てのうちで何よりも確かにキリスト教徒の臭いとトルコ人の臭いを嗅ぎ分けた。我が家の向かいに善良なトルコ人の家族が住んでいた。その家のトルコの女性が我が家を訪れた時、彼女が発する臭いに私は吐き気を催した。私はバジルの枝を折つてその匂いを嗅ぐか、鼻孔のそれぞれにアカシアの花を一輪ずつ差し込んだ。だが、このトルコ女性フアトウメには、エミネという四歳ぐらいの娘がいた。私は三歳ぐらいだつたらう。エミ

ネはトルコ風でもなく、ギリシア風でもない、不思議な匂いを発散させていて、私はそれがとても好きだった。色白でぼつちやりとしていて、髪はとても細いおさげにしていた。邪悪な視線に捉えられないようにと、おさげ髪の一つ一つに貝殻や青い小石をぶら下げ、手のひらと足の裏にはヘナが塗られていた。エミネはナツメグの匂いがしていた。

彼女の母親がいつ家を留守にするかを私は知っていて、その時は外門に出かけて行き、彼女が玄関口に座ってマスティハを噛んでいるのをよく見かけた。その時は《行くからね》と彼女に合図を送った。けれども、彼女の家の戸口には三つの段があり、私にはそれが非常に高く思えた。どうやってよじ登ろうか？ 汗びっしょりになり、悪戦苦闘した末に、一段目に登ることができた。その後には、二段目に登るといふ新たな苦闘が待ち構えていた。一息つこうと休み、顔を上げて彼女を見た。彼女は素知らぬ顔で玄関に座っていて、私に手を貸そうと手を差し伸べる素振りさえ見せなかった。じつと動かずに私を眺めて待っていた。《もし頑張つてここまで来られたら偉いわ。そしたら、一緒に遊びましょう。だけど、それが出来なかつたら、帰って！》と言っているようだった。

大奮闘の末、それに打ち克つて、彼女が座っている玄関口に辿り着いた。すると、彼女は立ち上がって私の手を取り、家の中に招き入れた。彼女の母親は他所で働いていて、午前中ずっと家にいなかった。私たちはすぐ、靴下を脱ぎ、床に仰向けに寝ころび、素足の裏を合わせた。私たちは物音一つ立てなかった。目をつむって、エミネの暖かさが彼女の足の裏から私の足の裏を通して、ゆっくりと膝に、腹に、胸に上ってきて、私を満たすのを感じた。非常に深い快感を覚えたので、失神するのではないかと思つたほどだった……。私の全人生において、これ以上鋭い喜びを与えた女はいない。女の体の暖かさの不可思議さをこれほど深く感じたことはなかった。七十年を経た今日でさえ、目を閉じると、エミネの暖かさが私の足の裏から上つて来て、私の体全体に、私の魂全体に枝分かれして行くのを感じる。

やがて、歩いたり攀じ登ったりすることに恐れを抱かなくなり、近隣の家に入つて行き、近所の子供たちと遊ぶようになった。世界は広がって行つた。

五歳になった時、石板にイオタとかクルーリとかを書くことを学んで、大きくなつたら手を添えてもらわなくてもアルファベットの文字が書けるようになると、初歩の手

習いの先生の家に連れて行かれた。先生はアレテイという名の善良で素朴な女性で、少し猫背で、背が低く、太っていて、顎の右側に黒子があつた。私の手を取って、石筆の持ち方や、指の使い方を説明してくれた。その時、彼女の吐く息はコーヒートの匂いがしていた。

始めのうちは、彼女が嫌だつた。息も猫背も気に入らなかつた。しかし、何故だか分からないが、次第に彼女は私の目の前で変身していき、黒子が取れ、背筋は真つ直ぐになり、たるんだ体は痩せていき、美しくなつていった。数週間後、ついに瘦身の天使となり、純白のキトン^{十六}を纏い、巨大なブロンズのラツパを持つていた。聖ミナス教会のイコンの一つに、私はこの天使を見たことが有つたのだろう。そして、子供の目はまた一つ奇跡を起こし、天使とアレテイ先生が合体した。

月日は流れ、私は外国暮らしの後、クレタに戻つてきた。先生の家の前を通つた時、年配の女性が玄關口に座り、日向ぼっこをしていた。顎の黒子で先生だと分かり、近寄つて自分が誰だか乗つた。先生は喜びのあまり泣き出した。お土産にコーヒート砂糖とルクミを持つていた。一瞬、訊ねるのが恥ずかしくてためらつたが、ラツパを持つた天使の印象が、あまりにも強く私の中に染み

着いていたので、自分を抑えきれずに訊ねた。

「アレテイ先生、白いキトンを着て、大きなブロンズのラツパを持つていたことがありますか？」

「なんですすつて！」気の毒な老女は悲鳴を上げて十字を切つた。「私が白いゼレンピア^{十七}ですつて？ 私がラツパを？ 神よ、お守りください！ 私がブリマドンナ？」

目には涙が流れ始めた。

私の子供時代の柔らかな脳の中では、あらゆるものが魔法のように改造されていった。理性を超え、狂気と思えるほどに。だが、この狂気は思慮分別を腐敗させない一粒の塩である。私はあらゆる瞬間に自分で作り出したおとぎ話の中で生き、話をし、歩んだ。その中に道を切り開き、進んだ。二度と同じものを見ることはなかつた。というのも、私はその都度それに新しい顔を与えていたので、見知らぬものになつて行つたから。世界の純潔さは刻々と新たなものになつて行つた。

とりわけある種の果物に、私は説明し難い魅力を感じていた。全ての果物の中で何よりもイチジクとサクランボに。果実としてのイチジクだけでなく、イチジクの葉とその香りにも。目を閉じてそれらの匂いを嗅ぐと、刺激的で官能的な幸福で青ざめた。いや、幸福ではなく、

あたかも暗い危険な森に入つて行くかのような動揺、恐怖、戦慄を感じた。

ある日、私は母に連れられて、カストロ郊外の人里離れた浜辺に行った。そこでは女たちが水浴びをしていた。私の頭は波立つ果てしない海で満たされた。温まったこの藍色の水の中から、とても青白い、か弱げな、私には病気のように思える不可思議な体が急に現れた。かん高い声を上げてお互いに一抱えの水を投げ合っていた。ほとんどの女は腰までしか見えなかった。腰から下は海の中にあつた。腰から下は魚で、いわゆる人魚なのだとは思いついた。祖母が私によく話してくれた、アレクサンドロス大王の妹の人魚のおとぎ話を思い出した。彼女は兄を求め、海を巡り、通り掛かりの船に尋ねていた。《アレクサンドロス王は生きていますか？》と。すると、船長は船端に身を乗り出して叫ぶのだった。《生きておられます、奥様。お元気で君臨しておられます！》と。もし彼が死んだと言おうものなら大変なことに！ 尾びれで海を叩き、大しけを呼び起こし、船を粉々に砕くのだ。

私の前で泳いでいたこれらの人魚たちのうちの一人が波間から身を起こして、私に手招きし、何か言った。け

れども、波の音が大きくて聞き取れなかった。しかし、私は既におとぎ話の中にどっぷり浸かっていたので、彼女がお兄さんのことを尋ねていると付度し、怯えながら大声で叫んだ。「生きておられます、お元気で君臨しておられます！」人魚たちはドツと笑った。私は恥ずかしくなり、腹をたてて逃げだした。《こん畜生！ 女たちだったんだ！ 人魚ではなかったんだ！》と私は眩き、すつかり恥ずかしくなつて、海に背を向け、小岩に腰を下した。

有り難いことに、この子供時代の光景が、今なお色鮮やかに、とてもにぎやかに、爽やかにまだ生きている。それは私の頭脳が腐敗に手を付けられないように維持し、萎れたり、枯れたりさせない。それは不死の水の聖なる滴であつて、私を死なせはしない。文章で海や女や神について語ろうとする時、私は胸に顔を寄せ、内なる子供の言うことに耳を傾け、その言葉を書き取る。そしてもし、これらの偉大な力——海、女、神——に言葉において幾分近づき、それらについて話すことができるとしたら、私の内にまだ生きているその子供のお陰である。いつも無垢な目で、初めて世界を見ることが出来るように、私は再び子供になる。

私の血の中で両親が共に循環している。一人は凶暴で、冷酷で、気難しく、母は優しく、善良で、清らかである。私は生涯、彼らを背負って生きている。どちらも死んではいない。私が生きている限り、彼らも私の中で生きていくだろうし、それぞれが正反対の方向から、私の思考や行動を支配しようと争っているのだろう。私の生涯における闘いは次のことである。彼らを和解させ、一方には力を与えてもらい、他方には優しさを与えてもらって、私の内に絶え間なく遊る彼らの間の不和が、彼らの息子の心の中で調和するように、ということである。

そして、さらに信じられないのは、次に述べるように両親の存在が、私の両手において、はっきりと明らかになつていくという事実である。私の右手は力強く、感受性が少しも無く、全く男性的である。左手は極端に病的な感受性を持つていた。愛した女の胸を思い出す時、左手の手のひらに、微かなむず痒さと痛みを感じる。もう少しで痛みで青くなりそうだったし、更に進むと傷が出来たことだろう。一人でいる時に鳥が空中を飛ぶのを見つめてみると、その鳥のお腹の暖かさが左の手のひらに感じられる。私の手に、私の手に於いてのみ、両親は隔離

され、別々の占有権を持つ。父は右手に、母は左手に。ここで私の人生に深く影響を与えたある出来事を付け加えなければならぬ。それは、私が受けた最初の精神的な傷である。老齢に達した今も、傷口はまだ開いたままである。

四歳くらいの時だったろう。近所の女性に会うのだと言つて、叔父が私の手を引いて、町の中にある聖マテオスの小さな墓地に連れて行つた。

時は春、墓地はカモミールの花に覆われ、片隅に植えられた一本のバラが、四月の小さな花を一杯付けていた。お昼頃だっただろう、太陽は大地を温め、草の匂いがしていた。教会の扉は開いていて、司祭はもう香炉に乳香を入れ、ペトラヒリヤ¹⁸を纏い、敷居をまたいで、墓地に向かつた。

「どうして香を焚くの？」私は叔父に尋ね、乳香と土の匂いを深く吸い込んだ。

暑かつたので、少しむせ返るように思われた。先週の土曜日に母に連れて行つてもらつたトルコ式浴場の臭いを思い出した。

「どうして香を焚くの？」墓の間を無言で歩き続けている叔父に再び尋ねた。

「黙っていなさい。今に分かるよ。付いて来なさい」

教会の裏に回ると、お喋りの声が聞こえた。五、六人の黒衣の女性たちが墓の周りに立っていた。二人の男が墓石を持ち上げ、その内の一人が墓の中に下りて掻き回し始めた。私たちは近寄って開かれた墓の上に立った。

「何をしてるの？」と私は尋ねた。

「骨を掘り起こしているんだよ」

「何の骨？」

「すぐに分かるよ」

司祭は墓穴の上に立ち、香炉を上下に振り、口髭の中から祝福の言葉を呟いた。私は新たに掘り起こされた土の上に身を屈めた。カビと腐敗臭で吐き気がして鼻をつまんだ。が、逃げ出さずに待っていた。《骨？ 何の骨？》と不思議に思いながら待っていた。

突然、身を屈めてかき回していた人が身を起こし、墓穴の上上半身が現れた。手には頭蓋骨を一つ持っていた。頭蓋骨から土を落とし、眼窩に指を突っ込み泥を取り除いた。墓の口にそれを置き、また身を屈め、かき回し始めた。

「それ何？」私は怯えて叔父に尋ねた。

「分からないのか？ 死んだ人の頭、頭蓋骨だよ」

「誰の？」

「覚えてないのかい？ 隣にいたアニカのだよ」

「アニカの！」

私は泣き、金切り声で叫び始めた。

「アニカの！ アニカの！」と叫び、地面に身を投げ出した。手当たり次第に石を引つ掴み、墓堀人にぶつけ始めた。

私は泣きわめき、叫んだ。彼女が何と美しかったか、どんなにいい匂いをさせていたか！ 彼女が家にやって来て、私を膝の上に乗せ、彼女の髪から櫛を外して私の髪を解いてくれたこと。私は脇の下をくすぐられて、ヒツヒと笑ったり、鳥のようにチーチーと声を上げたりしたことを。叔父は私を抱きあげ、少し離れたところに連れて行き、怒って言った。

「何故泣くの？ どうしろと言うのか？ 死んでしまったんだ。みんな死ぬのだ」

けれども、私は思い出していた。彼女の金髪を、私にキスしてくれた赤い唇を、大きな目を。なのに今は……。「アニカの髪の毛は？ 唇は？ 目は……？」と私は叫んだ。

「死んだ！ なくなっちゃった！ 大地がそれらを食べてし

まったんだ！」

「どうして？ 何で？ いやだ！」

叔父は肩をそびやかせて、言った。

「大きくなったら、どうしてなのか分かるだろうよ」

私は、決してそのことを学んだことはない。大人になり、老人になったが、決してそのことを学んではない。

【註】

本訳は Νίκου Καζαντζάκη ΑΝΑΦΟΡΑ ΣΤΟΝ ΙΚΡΕΚΟ, 一九八二年版 Εκδόσεις Ελένης Ν. Καζαντζάκη, Αθήναを底本とし、Ο κρηγής, Η μάνα, Ο γιοςの章を訳したものである。
今後はより原本に忠実に和訳の題を『グレコへの報告』とする。

一 アガス（アーヤーン）…オスマン帝国の末期、地方の徴税を請け負った地方名士。

二 蜂起の時代…オスマントルコの支配下からギリシアへの統合を期するクレタ島民（主としてギリシア正教徒）

の蜂起（一八六六〜一八九七年）。

（一）一八六六年〜六九年…クレタ島民側の戦力の不足、ヨーロッパ列強の圧力により、蜂起は失敗に終わる。

（二）一八七八年〜八八年…クレタ島内で急進派と穏健派が対立。急進派の増加を恐れたトルコがクレタに派兵。

（三）一八九六年〜九七年…クレタ島民のギリシアへの統合の期待と、トルコ人の島民殺害事件を契機とする蜂起。

（四）一八九七年…トルコ対クレタの戦いがトルコ対ギリシアに移行。ギリシアは敗北したが、この戦後処理の過程でクレタはオスマン国内での自治領化を容認された。

三 学校…一八九七年一家はナクソス島に避難し、カザンザキスはフランス系カトリック修道院付属学校で二年間学んだ。現在その学校は歴史資料館となっている。

四 聖ミナス…（二八五頃〜三〇九頃）エジプトの兵士であったが、後にフリギアの修道士となる。ディオクレティアヌス帝の時に殉教。一九世紀にトルコ支配下に於いてイラクリオの守護聖人となった。

五 イコン…東方キリスト教の聖像画。

六 メガロ・カストロ…現在のイラクリオ。

- 七 クルーリ…表面にゴマのついたドーナツ型のパン。
- 八 サバシアナ修道院…イラクリオ市街地から約二十キロ離れたロディア村に位置する。
- 九 カンディラ…教会の吊り下げ式ランプ。
- 十 ネロパプリス（水爺）…民間伝説に登場する自然界の精霊。
- 十一 ホクチタケ…ある種の硬質菌を火口として用いた。
- 十二 フオデレ…エル・グレコはこの村で生まれ育ったとの説が一時期あったが、現在はイラクリオ出身とされている。
- 十三 マンディナダ…同韻語で終わる、一行が十五音節の二行詩。クレタのマンディナダは表現の豊かさで有名。
- 十四 シトロン（ktrpo）：（別名）マルブシュカン。
- 十五 ムーストス…醗酵前のぶどう液でぶどう酒の原料。
- 十六 キトン…古代ギリシア人が着用した袖のない丈の長い着衣。
- 十七 ゼレンビア…白や淡い青の幅広で長いアラビア服。
- 十八 ペトラヒリ…聖職者が首にかける袈裟の様なもの。

（協力…現代ギリシア語教室エリニカ有志）